知財翻訳における生成AIの進化：2025年から2026年への構造転換

2025年：探索的導入と「人手検証」の限界

「手戻りの逆転現象」による負担増

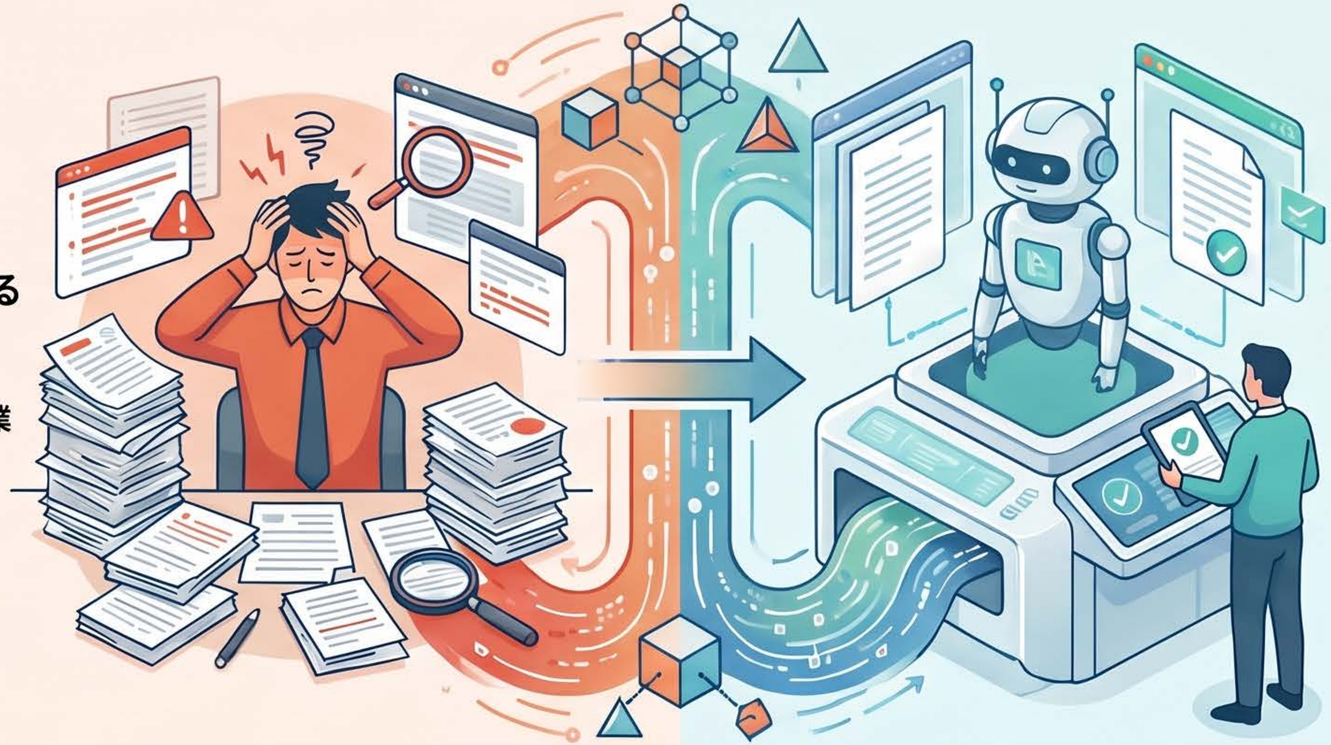
AIの滾慔な誤訳を確認するため、最初から人手で訳す以上の工数が発生した。

セキュリティ懸念による導入の足踏み

未公開出願書類をクラウドへ送信するリスクが、大手製造業での導入障壁となった。

単一プロンプトによる一括翻訳

汎用LLMを用いた一括処理が中心で、特許特有の機雑な文脈緤持に課題があった。



2026年：自律検証型エージェントと実務インフラの確立

修正必要率 0.05% の達成

0.05%

エージェンティックAIが自律的に推論・修正を行うことで、驚異的な精度を実現した。

妥当性根拠の明示（ホワイトボックス化）

AIが訳語を選択した論理的背景を示すことで、人間の検証負荷を大幅に削減。

スタンドアロン型ローカルLLM

物理的にネット隔離された環境で動作し、機嶽情報の漏洩リスクを完全に遮断。

2025年 実務モデル

検証手法	セキュリティ	人間の役割
人手による全件目視修正(MTPE)	クラウドSaaSへの依存	誤訳を偍す「作業者」

2026年 実務モデル

検証手法	セキュリティ	人間の役割
AIによる自動検証と根拠提示	ローカルLLMによる物理的遮断	プロセスを鈬制する「責任者」